

2020年8月9日 説教「人に頼らず」

創世記 41 章 1～13 節

献酌官長は元の職務にもどり、調理官長は悲惨な最期を迎えました。しかし、献酌官長はヨセフのことをすっかり忘れていました。

### 1. パロの見た夢 (1～4 節)

①二年の後 (1) 「それから二年の後、パロは夢を見た。見ると、彼はナイルのほとりに立っていた。」ヨセフが二人の夢の解き明かした出来事から2年がたちました。エジプトの王であるパロは一つの夢を見たのです。夢のなかで、パロはナイルのほとりに立っていたのです。ナイルとはナイル川のことです。エジプトの国の中央をその川は流れていました。洪水被害がある一方、その川は国の農業などにとっても大きな益をもたらすものでした。

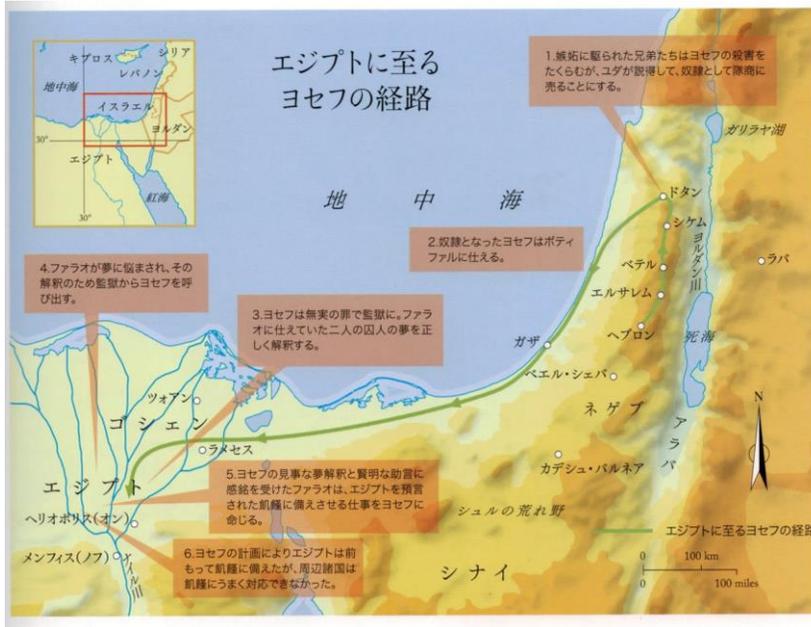
②パロの第一の夢 (2～3) 「ナイルから、つやつやした、肉づきの良い七頭の雌牛が上がって来て、葦の中で草を食べていた。するとまた、そのあとを追ってほかの醜いやせ細った七頭の雌牛がナイルから上がって来て、その川岸にいる雌牛のそばに立った。」パロの見た一番目の夢は、そのナイル川が舞台でした。夢の内容はこうでした。肉付きの良く肌つやの良い七頭の雌牛があがって来て、草を食べていたのです。すると、それを追いかけるようにして、別の七頭がやって来たのです。後者の雌牛たちはやせ細り、みすぼらしい外見でした。双方がナイル川にそれぞれ並ぶと、外見は対照的でした。

③やせ細った雌牛が (4) 「そして醜いやせ細った雌牛が、つやつやした、よく肥えた七頭の雌牛をくいつくした。その時、パロは目がさめた」その夢の恐ろしいところは、そのあとに続く部分でした。つまり、やせ細った雌牛たちが、肥えて外見の良いほうの牛たち七頭の雌牛を食い尽くしてしまったというのです。その時にパロは目が覚めました。そんなことがあるのですか、などと考える必要はありません。夢は概して奇想天外だのですから。ともあれ、パロには気になる夢でした。

### 2. パロの見た夢 (5～8 節)

①肥えた穂 (5) 「それから、彼はまた眠って、再び夢を見た。見ると、肥えた良い七つの穂が、一本の茎に出て来た。」パロの見た二番目の夢はこうでした。七という数字が前の夢と同じです。よく実った七つの穂が、一本の茎から出てきたのです。麦の茎でしょう。そこから豊かに実った七つの穂という点は、肥えた七頭の雌牛と重なってきます。

②しなびた七つの穂が (6～7) 「すると、すぐあとから、東風に焼けた、しなびた七つの穂が出て来た。そして、しなびた穂が、あの肥えて豊かな七つの穂をのみこんでしまった。その時、パロは目が覚めた。それは夢だった。」東風というのは水源を枯らし、泉の干上がりをもたらすことがあったようです (ホセア 13:15)。豊かな穂の後に、現



れたのは、その東風で焼けたしなびた七つの穂でした。それはあの醜いやせ細った雌牛と重なります。さらに、その穂が肥えた七つの穂を飲み込んでしまったというのです。これも前の夢と重なってきます。パロは夢にうなされて、目が覚めたことでしょう。

- ③呪法師たちを呼び寄せ (8) **「朝になって、パロは心が騒ぐので、人をやってエジプトのすべての呪法師とすべての知恵ある者たちを呼び寄せた。パロは彼らに夢のことを話したが、それをパロに解き明かすことのできる者はいなかった。」**朝になっても、パロは夢の内容が気に入り、エジプト中の呪法師や知恵ある者達を集めたのです。そして夢の内容を伝えたのですが、誰も解き明かしができません。うかつなことを言えば、大変なことになることは知っていますから、皆おじけづいてしまったこともあるでしょう。

### 3. ヨセフを思い出した (9~13 節)

- ①私のあやまちを (9) **「その時、献酌官長がパロに告げて言った。『私はきょう、私のあやまちを申し上げなければなりません。』**誰もパロの夢の解き明かしができないのを見て、献酌官長は一つのことを思い出したのです。そして、パロに謝罪をしたのです。それは、2年余り前のことで、パロに報告しなければならないのに怠っていたからです。
- ②意味のある夢 (10~11) **「かつて、パロがしもべらを怒って、私と調理官長とを侍従長の家に拘留なさいました。その時、私と彼は同じ夜に夢を見ましたが、その夢はおのおの意味のある夢でした。」**献酌官長にとっては忘れようとして忘れられないこと。また、嫌な思い出ですから極力、忘れようとしてきたことです。パロ様も覚えておられるかもしれませんが、私たちがあの侍従長ポティファルの監獄に入っていた時のことです。あの時、私と調理官長は同じ夜に、夢を見たのです。それはとても不思議な夢でした。私の夢は、ぶどうの木に三本の蔓があり、芽を出すと、花が咲き、やがて実が実って杯にジュースをしぼって入れて、パロにささげたというものだったのです。
- ③解き明かし (12~13) **「そこには、私たちと一緒に侍従長のしもべでヘブル人の若者がいました。それで彼に話したところ、彼は私たちの夢を解き明かし、それぞれの夢にしたがって、解き明かしてくれました。そして、彼が私たちに解き明かしたとおりになり、パロは私をもとの地位に戻され、彼を木につるされました。」**献酌官長がパロに告げた事は続きます。そこに、その監獄に侍従長のしもべで私たちの世話をしてくれていた、ヘブル人の若者がいたのです。その彼に、さきほどお話しした夢のことを話すと、見事に解き明かし、その通りになったのです。実際、私はパロ様の側近に戻され、調理官長は木につるされたのです。あの若者なら、もしかすると、パロ様の夢の解き明かしができるかもしれませんとパロに伝えたのです。

### 《結論》

献酌官長の夢を解き明かして、獄から出ることを願っていたヨセフですが、献酌官長からはすっかり忘れられ、二年間は監獄に留まることになりました。しかし、この期間を通して、ヨセフは待ち望む信仰を教えられていったことでしょう。「望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。」(ローマ 12:12) の御言葉にあるように、希望を抱きつつ喜ぶ心へと導かれ、困難な環境に耐えつつ、祈り続けることを学んだことと思われます。

それから2年。彼は41章46節によりますと、30歳とありますから、17歳でエジプトに来てポティファルの下で働いた年数が10年ほどあったと考えられます。それから2年で30歳。彼にとっては、その時が近づいていました。つまり、監獄の中であって忠実に務めを果たしながら、過ごしているうちに、時がやって来たのです。すっかりヨセフのことを忘れていた献酌官長が、パロの夢を通して、ヨセフのことを思い出したのです。今朝の聖書箇所では、パロの見た夢を呪法師や知恵ある者たちも、解き明かせない状態を見て、献酌官長がヨセフのことを思い出したのです。「天の下では、何事でも定まった時があり、すべての営みには時がある」(伝道者の書 3:1) とありますが、ヨセフが用いられる時がやってきたのです。「神のなさることは、すべて時にかなって美しい」(同 3:11) とあるように、ベストタイムが到来していたのです。

主なる神はまた、事を起こされるにあたっては、他の人や状況を用いてくださいます。ベストの時に、パロの夢という出来事の中に、献酌官長の記憶のうちに呼びかけてくださいました。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ人への手紙 8章 28節) とあるように、人々に様々なかたちに働きかけてくださり、私たちに必要なことを備えていってくださるのです。

それならば、もっと早くにこうした備えて下さっても良いのではという疑問が生じるかもしれません。しかし、ヨセフは徹底して次のことを学ばなければならなかったのです。すなわち、「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が主から離れる者はのろわれよ」(エレミヤ書 17:5) とあります。ヨセフは夢の解き明かしをした時に、献酌官長に、「とりたてられた時には、ぜひ私のことをパロに知らせてください。」と言い、自分の氏素性なども知らせて、アピールしたのです。そうした情報も確かに用いられました。しかし、ヨセフが人間の力に寄りすがっている時には、主は道を開かれなかったのです。主なる神だけが、導き主で備え主であることを確信する心が育てられるまで、神は時を用いられたのです。

今朝、私どもの課題の解決にも主の時があることを信じつつ、人間にではなく、主なる神によりすぎる信仰を求めさせていただきたいのです。

神に信頼する時に祝福があるのです。主にのみ信頼していきましょう。